

1 研究主題について

(1) 研究主題

社会的事象を多面的・多角的に考え、自己の考えを主体的に表現できる生徒の育成

(2) 主題設定の理由

新学習指導要領では、中学校社会科の目標として以下のことが述べられている。

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

現代の社会情勢を見ると、民族や宗教問題から生じる紛争やテロ、資源や原発に関わるエネルギー問題、地球環境と自然災害に関する問題、憲法改正の問題、少子高齢化から生じる人口問題やそれに伴う財政の問題、領土問題など、多くの問題が山積みとなっている。これらは決して他人ごとではなく、特にこれから社会へ歩み出していく子供たちにとって、生き方や生活に影響を及ぼす可能性がある問題である。このような現状の中で、日本人として何ができるかを考え、よりよい社会を形成していくためにこうした問題の解決に取り組んでいかなければならない。

中学校の社会科においては、グローバル化が進み、このような多くの問題が他人ごととは言い難い現代だからこそ、世界や日本に関する基礎的教養を培い、国際社会に主体的に生き、一人ひとりが社会を形成していく自覚をもって自ら社会参画していく資質や能力を育成することが必要である。その実現のために、社会的事象に対する興味・関心を高め、あらゆる社会的事象に対して生徒が主体的に多角的・多面的に思考を深め、考える力を養うことが必要と考えた。また、今日的な社会問題で、特に、定まった答えのない問題に対しては、自分のなりの考えをもち、他者との交流をしながら意思決定をしていく力（「価値に関する認識の形成」）が必要となる。これらの力を身につけさせることが、研究主題で目指す生徒の育成につながると考え、本実践を行った。

(3) 願う生徒の姿

- ①社会的事象に興味関心をもち、既習内容や生活経験と関連付け、多面的・多角的に考えることができる生徒
- ②自分の考えをもち、仲間と意見を交流する中で学び合い、自分の考えや社会認識を深めていくことができる生徒
- ③社会的事象に対して、見方・考え方を働かせ、根拠や理由を示しながら、自分の考えや価値判断を自分なりの言葉で表現できる生徒

2 研究内容について

(1) 研究仮説について

単元のねらいを明確にし、思考の連続を生み出す単元構想図を作成すること、学び合う必然性を生み出す少人数交流を位置付け、社会的事象に対して多様な視点や考えから仲間とともに考察すること、さらに、確かな「事実に関する認識」や既習学習をもとに、社会的事象の本質に迫り、より深い思考や認識へ導くために、個々の見方・考え方や「価値に関する認識」が試される授業を設定することで、自己の考えを主体的に表現する力をもった生徒を育成することができる。

(2) 研究内容（視点）

《研究内容1》

学びの流れを明確にした単元構想図の作成

《研究内容2》

学び合いにつながる少人数交流の位置付け

《研究内容3》

見方・考え方を働かせ、自分の考えを広げ深める授業展開の工夫

(3) 研究の具体的方途

《研究内容1》

学びの流れを明確にした単元構想図の作成

単元の見通しと終末の姿の具体化を明確にするために、「単元終末の姿の明確化（到達目標の設定）」と、「思考の連続性を生み出す単元構想図の作成」を重点とし、授業実践に活用した。

《研究内容2》

学び合いにつながる少人数交流の位置付け

学び合う必然のある学習活動を生み出すために、少人数交流のポイントを生徒に示し、少人数交流の形態（ペア、グループ、スクランブルなど）やタイミングを工夫しながら、毎時間の授業内に位置付けた。

《研究内容3》

見方・考え方を働かせ、自分の考えを広げ深める授業展開の工夫

単元を通して身に付けた知識や事実認識をもとに、課題に対して、生徒の一人ひとりがどのように考えるのかを重視した授業を設定した。多様な価値観や考え、意見の交流を通して、さらなる考えの深まりや自己の価値判断能力、社会参画につながる力の育成を図った。

3 実践事例

①実践1 地理的分野（1年生）

「アフリカ州—特定の生産品にたよる生活からの変化—」
（平成29年10月）

②実践2 公民的分野（3年生）

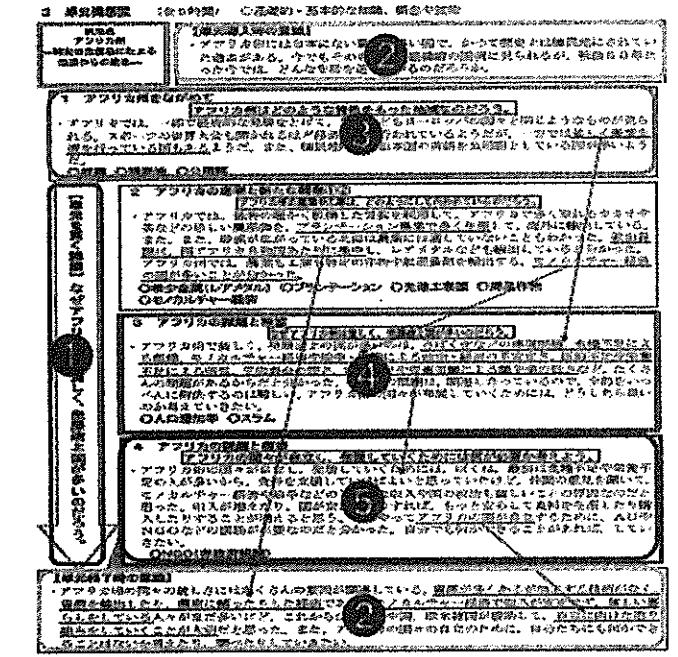
「これからの日本と地域社会—日本の社会保障—」
（平成30年2月）

〈研究内容1〉

学びの流れを明確にした単元構想図の作成 について
実践事例①

アフリカ州—特定の生産品にたよる生活からの変化—

単元のねらいを達成するために、単位時間の役割を明確にし、毎時間の既習学習が次時の授業内容とつながるよう、生徒の思考の連続性を意図的に生み出す単元構想図の工夫が必要である。そこで、単元構想図を作成する上で、以下の5点を単元構想図の中に位置付けた。それぞれの項目の役割は次の通りである。



- 単元構想図の作成における工夫(地理的分野)**
- ① 「単元のねらい」を明確化と「単元を貫く課題」の設定
 - ② 単元前と単元学習後の生徒の意識の位置付け
 - ③ 単元の導入時に地方の特色を大観する授業の設定
 - ④ 単元通して生徒が習得した知識・技能を活用する「単元の中核となる授業」の設定
 - ⑤ 学習した「事実に関する認識」をもとに、生徒の見方・考え方を働かせ、自分の考えを広げ深める授業の設定

単元を構想する際は、単元のねらいをもとに「単元を貫く課題」を設定し、学習の見通しをもたせた。毎時間、単元を貫く課題に立ち返り、単位時間に学習している内容が、最終的に「単元を貫く課題」の解決に必要なことを意識させた。また、単元前と単元学習後の生徒の意識の位置付け、単元を学習することで生徒の意識や認識の変容を明らかにすることを意図した。

単元構想図のうち、単元のねらいに最も迫る授業として、「単元の中核となる授業」を位置付けた。アフリカ州の第4時では、単元を貫く課題「アフリカ州に、貧しく、発展途上の国が多いのはなぜだろう。」を、実際に授業時の課題とした。

第5時には、「アフリカの国々が自立し、発展していくためには何が必要か考えよう。」を学習課題とし、既習内容や中核の授業で獲得した社会認識を活用し、今後のアフリカ州の未来について考える授業を設定した。この授業を単元の出口にすることで、単元で学んできたことを活かし、見方・考え方を働かせてより深い社会認識をたどりつることができるよう単元構成を行った。

実践事例②

「これからの日本と地域社会—日本の社会保障—」



公民の単元では、日本の社会保障の現状と、これから目指すべき日本や地域社会について考えることができるよう、単位時間の役割を明確にし、単元を構成した。単元構想図には、「習得」「活用」を位置付けた。

第1時は、地理の実践と同様に、日本の少子高齢社会や財政の現状と、この先に起こりうる問題を確認し、「単元を貫く課題」を設定する時間とした。「単元を貫く課題」は、価値に関する認識を問う文言で設定した。

第2時では、国民生活を向上させるための政府の役割と現在の社会保障制度について学習する時間とした。

その上で第3時では、前時までの既習事項を活かし、単元の中核となる授業として、日本のこれからの社会保障制度のあり方について価値判断し、議論する授業を組み入れた。

第4時では、単元を貫く課題に対して、第3時までと異なる視点(経済発展や公害、環境保全)から考える授業を仕組み、安心・安全、豊かに生活していくには、環境保全が循環型社会の重要性を捉えさせるようにした。

第5時には、過疎地域において、高齢者の活躍できる町おこしを行い、持続可能な地域社会の形成に取り組んでいる自治体の事例として、徳島県上勝町の取り組みを取り上げ、住民が主体的に豊かな地域社会の一員として地域づくりの貢献していくことの大切さについて学びとれるようにした。

第6時では、「これからの日本が、豊かな社会を維持していくにはどうしたらよいのだろう」という課題について、これまでの学習を踏まえて考え、交流をすることで、豊かな生活や社会を持続させていくために必要なことについて考えさせ、この単元のまとめとした。

このように地理分野・公民分野において、単元の流れや単位時間の役割を明確にし、既習事項のつながりや思考の広がり、深まりを生み出す単元構想をつくることで、社会的事象に対して、自分たちが主体者として積極的に考えていこうとするという認識を育て、「社会の形成に参画する力」を育成できるようにした。

＜研究内容2＞

学び合いにつながる少人数交流の位置付け について

社会科の授業では、毎時間、個人追究の後に少人数交流に時間を設けた。少人数交流をするにあたり、効果的かつ有益な学習活動になるよう、生徒たちには少人数交流のポイントを指導し、意識させた。少人数交流のポイントは以下の5点である。

少人数交流のポイント

- ①必ず自分の意見を発言し、発言し終わったら相手の発言を聴く。
- ②自分の意見を発言する際は、どの資料の、何をもとにして見つけた意見なのか、根拠を示して発言する。
- ③個人追究をして分からないことや疑問点がある場合は、その内容を発言する。
- ④仲間の意見を聴く際は、発言の根拠はどこにあるのかを確かめながら聴く。
- ⑤仲間の意見を聴く際は、その発言が本当に正しいと言えるかどうか、批判的に聴く。

また、授業内容や学習課題に合わせて、少人数交流の形態を変える工夫を行った。少人数交流の形態は主に以下の3パターンである。

少人数交流の形態

- a. ペア交流（2人）
自分の考えを隣同士、もしくは前後、斜めの生徒と交流する。
- b. 班交流（3～4人）
2人以上の複数人で交流を行う。教え合いの他、班での意見の合意、ペアよりもさらに多様な意見の交流ができるように仕組む。
- c. スクランブル交流
自由に席を立ち、複数の仲間と意見交流を行う。より多くの仲間の多様な見方・考え方に触れたり、自分の考えを主張したりする授業課題の際に行う。

さらに少人数交流を授業に組み込む際に、少人数交流が生徒たちにとってより必然性のある活動となるように、活動を仕組むタイミングについても留意した。

少人数交流のタイミング

- I. 個人追究の後に、少人数交流を行う。
→全体交流の前に、自分の考えを確かめる機会を設ける。また、どの生徒にも一時間の内で必ず、自己の考えを表現する場を確保する。
- II. 深めの発問・資料提示の後に、少人数交流を行う。
→深めの発問・資料提示によって、生徒の思考を立ち止まらせた際に、仲間と協働で考えることが必要な時に少人数交流を取り入れる。

実践事例①

アフリカ州—特定の生産品にたよる生活からの変化—
実践①の「アフリカ州」第4時では、課題に対して、ワークシートを用いて個人追究を行い、その後、グループ交流を行った。

見方・考え方の異なる生徒一人一人が、自分の意見を発表し、交流していく中で思考の広がりや深まりを生み出すよう、この授業ではグループ交流の形を取り入れた。班で意見にまとめる際に、意見の合意がしやすいよう、拡大したワークシートとペンを配布し、書き込みながら少人数交流ができるよう工夫した。

実践事例②

「これからの日本と地域社会—日本の社会保障—」

本単元の中核となる第3時の授業では、「価値に関する認識」を問う授業展開であるため、少人数交流では、ペア交流の後に、さらにスクランブル交流を取り入れた。スクランブル交流では、できる限り多くの生徒と交流を行い、多様な意見に触れたり、違う視点や立場から考えたりすることができるよう、「自分と同じ考えの人と3人以上交流」「自分と考えの違う人と3人以上交流」など、具体的な指示を与え交流させた。

少人数交流（ペア、スクランブル）の様子

＜実践②「日本の社会保障」第3時より＞



＜研究内容3＞

見方・考え方を働かせ、自分の考えを広げ深める授業展開の工夫

研究内容3では、見方・考え方を働かせ、自分の考えを広げ深める授業展開を単元や授業の中に位置付けるように工夫した。さらに公民的分野では、見方・考え方を働かせ、自分の考えを広げ深める授業の一つとして、「価値に関する認識」を問う授業を数多く取り入れた。

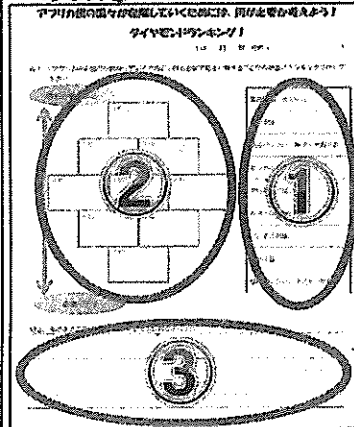
「価値に関する認識」を形成する学習は、生徒が価値判断の内容を形成することをめざすものである。学習内容に関する今日的な社会問題に対して、地理や歴史の学習で獲得してきた「事実に関する認識」を踏まえて、「価値に関する認識」を形成させるための問いを設定する。生徒はこれまでの学習や生活経験をもとに、定まった答えのない問題について、自分なりの考えをもち、他者との交流により、その考えを広げたり、深めたりしていく。こうした価値判断を含む問題解決的な学習こそ、知識、概念や技能をもとに、見方・考え方を働かせて如何に自らの考えを構成するかという今日的な教育課題に応える学習であり、これからさらに必要な問題解決的な学習であると考えた。

実践事例①

アフリカ州—特定の生産品にたよる生活からの変化

実践①では以下のようなワークシートを活用した。

＜実践①「アフリカ州」ワークシート＞



①第4時で追究した、アフリカ州の国々の貧しさの要因（事実に関する認識）

②アフリカの国々が貧しさから抜け出し、発展していくためには、何から優先して解決していくべきかを順位づけ（個人の見方・考え方）

③②のように判断した理由と、具体的な方法を記述（論理的根拠を記述）

ワークシート中の①～③の手順で記入させ、「アフリカの国々が自立し、発展していくためには何が必要か考えよう。」という課題に対する自分の意見をもたせた。

ワークシート記入後、少人数交流や全体交流にてさまざまな意見とその理由を聴くことを通して、見方・考え方を働かせ、新たな考えに気付いたり、考えを深めたりすることができるよう、生徒から出来るだけ多くの意見を引き出すことを心がけた。全体交流を行った上で、意見をどれか一つにまとめることはせず、自分は最終的にどの考えを尊重するのかをまとめとして記述させた。

実践① アフリカ州(第4時) 生徒のまとめの記述

私は、食料不足を解決した方がいいと思いました。そうすれば、働き手を増やす必要がなく、人口増加を防げるし、学ぶどころじゃなくなっていた子どもたちも学校へ行けるし、それによって医師も増えると思ったからです。また、「AU」もできているので、これから、アフリカの人々や協力している人たちにがんばってほしいし、自分にできることがあるなら、見つけてやりたいと思いました。

実践事例②

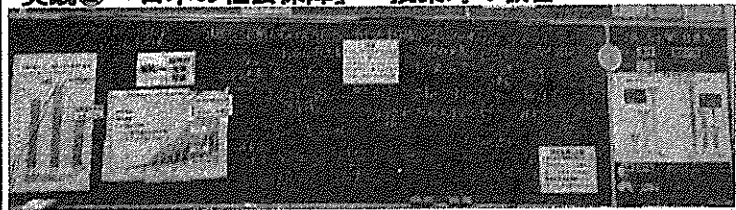
「これからの日本と地域社会—日本の社会保障—」

本単元では、第3時に「価値に関する認識」を問う授業を設定した。第3時では、日本の社会保障制度のあり方を考えるために、授業導入ではまず、現在の日本の人口構成及び、社会保障費について確認した。さらに、今後予想される人口推移と日本で生じる諸問題(高齢者の貧困、社会保障費と公債費の増大、労働人口一人当たりに対する負担など)を確認し、今のままの社会保障制度では、この先の超高齢社会を支えきれないことに気づかせた。

現状の社会保障制度と、この先の日本の人口推移及び人口構成との関連から、この先の社会保障制度の在り方を考えることが必要であることを実感させ、学習課題「少子高齢社会が進展する中で、日本の社会保障はどうあるべきなのか考えよう。」を設定した。生徒には、この先の日本のめざす社会保障のあり方は、「高福祉高負担型」か「低福祉低負担型」のどちらかを自己の価値判断に基づき決定させ、考えさせた。

ペア交流、スクランブル交流の後の全体交流では、黒板を二分し、「高福祉高負担型」と「低福祉低負担型」のそれぞれの意見を位置付け、分類した。全体交流の中段では、「公正」の視点を以て、それぞれの立場が優先している価値について明確化し、「高福祉高負担型」と「低福祉低負担型」のどちらにも良さや課題があることを理解させた。

実践②「日本の社会保障」 授業時の板書



終末は、単元の課題「…私たちが安心して生活し、豊かな社会を維持していくにはどうしたらよいのだろう。」という視点も踏まえながら、自己の最終価値判断をさせ、まとめの記述をさせた。

実践②日本の社会保障(第3時) 生徒のまとめの記述

私は意見変わらず、スウェーデンがいいと思って、教育費や医療費は無料だし、アメリカとスウェーデンの一人あたりの年収を比べると、116万円しか変わらない。その116万円は、教育費や医療費で結局なくなるし、スウェーデンは手厚いサービスがあって、高齢者にとってはうれしいから。また、保育サービスがあると、働く女性が増え、育児も両立できるから。

4 成果と課題

研究内容	○成果 と △課題
1	○毎時間の役割を明確にした単元構想図と単元を貫く課題を作成は、生徒の思考の流れを連続させ、既習事項を活用する力や、多面的・多角的に考える力を育てるために有効であった。
2	○授業のねらいに合わせて、少人数活動の形態を工夫したことで、自分の考えを積極的に発言できる生徒が大変多くなった。 ○少人数交流の取り入れる際に、少人数交流の方法・形態・必然性の3つが必要であることが明らかになった。 △スクランブル交流では、個の動きや意見交流の内容、生徒の考えの変容の全体把握することが難しい。
3	○生徒の意見交流の様子や、まとめの記述から、根拠を明らかにして、論理的に自分の考えを話したり、まとめを記述したりする姿が大幅に増えた。また、仲間の意見から学ぶことや、より深い考え、新しい視点から見た考えに気付く姿が増えた。 △公民の授業で「価値に関する認識」を問う授業を取り入れる際は、生徒に何を問い、考えさせるのか、そしてその評価をどのように行うのかといった基準を設定するのが難しい。 また、生徒の価値判断を中立に捌く教師の高い力量が必要となる。

5 課題克服のための今後の方向

研究内容	上記の課題克服のための方針
2	●スクランブル交流がその学習内容に対して有効か、より慎重に吟味し、授業に取り入れる。 ●少人数交流の必然性を大切にしながら、方法や形態についてもより効果的・効率的なものにしていく。また、より具体的な少人数交流のマニュアル化などを行い、どの生徒にも確実に力をつく活動にしていく。
3	●「価値に関する認識」を問う授業を行う際は、単元構想図などを活用し、確かな知識・理解、事実に関する認識を土台として、よりねらいを明確にし、慎重に単元に組み込んでいく必要がある。 ●刻々と変わる社会情勢に対して、教師が高いアンテナをはり、多様な価値観や考え方を尊重する態度や器を、教師自身が常に磨いていくことが必要である。